「信仰・希望・愛」の展開の物語

第七部　≪愛なる神≫溢れる愛　満たす愛　沁み込む愛（その１）

最初に、「愛の讃歌」　愛がなければ（Ｉコリント十三章について）

「あなた方は、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。そこで、わたしはあなた方に最高の道を教えます」（Ｉコリント１２；３１）

既に第５部において、私たちひとり一人に授けられている賜物(カリスマ)が、父なる神、子なるイエス・キリスト、聖霊なる神から、(エクレーシア)＝霊なる教会、を建ち上げる為に上より与えられたものであり、個人の徳を称賛する為ではないことを学びました。色々な賜物を持たされたそれぞれの人が、**決して自分を誇ることなく、**主キリストの下に一致して教会を創ることが神様の目的なのだと知ったわけですが、パウロはここで、最も大きな賜物**「愛」を**追い求めなさい、と云って、***「愛の讃歌」***を述べ始めます。「愛」は最高の道なのです。人間が自分の生命を生き切るのに、最も価値のあるものは「愛」であると、文章のはじめに詩的な言葉で美しく語ります。**愛こそ神の霊の本質であり、**愛がなければいかなる霊的な賜物の顕われも、神とは関係なく、空しく、カリスマ(賜物)を持っておる人の働きも空しいのです。

「たとえ人の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしい銅鑼、やかましいシンバル。たとえ預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人の為に使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない」（Ｉコリント１３；１―３）。

最初に異言が取り上げられたのは、当時のコリント集会の人々が、この特異な御霊の現れを特に誇っていたからでしょう。彼らの語る異言は、異国の人の言葉だけではなく、天使の言葉だとされていたと推察されます。確かに御霊の語らせる異言には、天上の響きを思わせる**霊歌**が出ることがあります。続いて預言と知識が取り上げられます。コリントの教会は自分の霊知《グノーシス》を誇る人たちがいて、パウロは特にこの人たちを戒めねばなりませんでした。また御霊の力に頼り病を癒し奇跡を行う者は、その様な力ある信仰を誇り、他の人の信仰を見下げる傾向の人がいました。その人たちに(山をも移す信仰)=力があっても、愛がなければ何にもないのと同じだと警告します。最後に、「全財産を貧しい人の為に使い尽くす」とか、信仰の為に「わが身を死に引き渡す」と云う最高の宗教的行為も、愛を生きる為でなければ、人に誇ることはできても、神の前では何の益にもならないとされます。施

しとか喜捨は、単なる道徳的行為とか慈善行為ではなく、自己否定の行為であり、宗教的行為としては最高の行為です。それでも「愛がなければ」何の益もないのです。

こうして愛だけがすべての霊的な能力と宗教的行為を意味あるものとする源泉であることが、示されます。では、その愛はどう云うものでしょうか。愛が実際に働く姿は？

愛の働き

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」（Ⅰコリント１３；４～7)、

ここで愛(アガペー)の働きが１４の動詞を用いて描かれます。愛は、御霊と云う神の命の本質です。それが人の中に宿り、働き、現れる時の姿が、簡潔に見事に表現されています。初めの二つ、「忍耐強い」と「情け深い」は、愛の積極的な働きを描きます。「忍耐強い」と云う動詞はガラテヤ書(５；２２)では名詞形で「寛容」と訳されています。「違い」や「対立」、「敵意」までも耐えて、相手を広い心で受け入れる姿です。「情け深い」と云う動詞は、父が「情け深い」と云われる時の形容詞(ルカ６；３５)を動詞にしたものです。父がそうされるように、受ける価値のない者にも無条件で与える姿勢です。この二つの動詞の裏に、イエスが言われた「敵を愛しなさい」とか「あなた方の父が慈悲深いように、あなた方も慈悲深い者になりなさい」(ルカ６；３６)と云う言葉が響いてきます。

次の「ねたまない」から「不義を喜ばない」まで、八つの否定形の動詞が続きます。この八つの動詞は、人間の本性(パウロはそれを肉と呼んでいます)に巣食う生来の悪を見事に列挙しています。私たちはその本性的な悪(パウロはそれを肉の働きと云います)を努力や修行で抑えることが出来ないのです。そのような本性的な悪を駆逐して、その様な悪をしないように出来るのは、御霊の愛の力だけです。**御霊は悪と相反する質の命だからです**。

ところで、ここで列挙されている行為をすべてしたから愛を実現したとは言えないことに注意すべきです。愛はそういう人間の倫理的、道徳的行為の総計とか結果ではないのです。愛はいのちの質であり、御霊の賜物、その現れなのです。御霊の無い所に、「アガペーの愛」はありません。

パウロはこの「愛の働き」を最後に一文で締めくくっていますが、市川師は次のように訳しておられます。

「愛はすべてを包み、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを担う」と。

ここで用いられている「すべて」は、全部とか全体と云った意味ではありません。どんな相手でも、どんな状況でも、つまり、敵であっても、状況が絶望的であっても、相手を包み

込み、信じ抜き、共に喜ぶ将来を望み、苦難・苦悩を自分の方で担うのです。それは人間の力では無理ですが、神の霊だけが可能にする愛です。破れ果てた人間の愛をいやし、壊れた関わりを見事に建ち上げて行くのです。市川師は、「すべて」を次のような比喩で示唆しています。

「愛は、海のように包み、太陽のように信じ、星空のように望み、大地のように担う」。

海はどのようなものでも大きな懐に包み込んでいます。そのような形のものは包み込めないと否定しません。太陽は、よい実を生み出すことを信じて万物に命の光を注いでいます。星は闇夜に輝いて行くべき方向を指し示します。大地は万物をその上に担い、重くて嫌だと苦情を言いません。破れ果てた世界で《アガペー》は、包み、信じ、望み、担うのです。

「愛は滅びない」

愛は決して滅びない。預言はすたれ、異言はやみ、知識は廃れよう。わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから、完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。幼子だった時、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことは捨てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがその時には、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているように、はっきり知ることになる。それゆえ、信仰と希望と愛、この三つは、いつまでも残る。その中でも最も大いなるものは愛である。（１３；８～１３）。

神の愛(アガペー)は聖霊の賜物(カリスマ)の一つです。しかしアガペーと云うカリスマは、預言や異言や知識(グノーシス)や力ある業など、他の賜物とは違います。「部分的なもの」、「一時的なもの」とは違い、「アガペー」は「完全なもの」「永続するもの」である点が決定的な違いです。

預言や異言や知識が部分的と云われるのは、その賜物がすべての人にではなく、特定の働きを担う一部の人にだけ与えられる賜物であると云う意味もありますが、ここでは、その内容が真理の全体ではなく一部にしか参与していないと云う意味で、「部分的」と云われます。それに対して「愛」は、**御霊によって生きるすべての神の子に与えられる賜物であるだけではなく、それは真理の全体にあずからせると云う意味で「完全なもの」と云わ**れています。**愛(アガペー)は神のいのちそのものであるからです。**そして「完全なもの」(愛)が来たときには、部分的なものは廃れることは、幼児と成人の譬えが用いられます。部分的な賜物で満足している者は幼児にたとえられ、愛と云う完全なものに生きる者が、人生そのものを理解している成人にたとえられます。大人となった今は、幼児の生き方は卒業したのです。つま

り、成熟したのです。

次に鏡の譬えが来ます。当時の鏡は金属の表面を磨いたもので、今の鏡のようにはっきりと写すことはできませんでした。鏡の譬えでは「今は」と「その時」が対照されています。「朧に」(原意は「謎において」)見ている今と違って、その時にはもはや『顔と顔と合わせて』見るように鮮明になると云うのです。パウロはその事を自分の確信として宣べています。はっきりと知ると云う動詞の名詞形が**「エピグノーシス」**です。地上の《グノーシス》(知恵)は部分的で不完全です。しかし完全なものが来る(その時には)」《エピグノーシス》(完全な霊知)が実現するのです。この譬では、完全なものが来るのは終末のこととされ、現在体験されている預言や異言や知恵などのカリスマは、部分的であり、一時的(過ぎ去って行くもの)に過ぎないことが強調されています。そして「愛」の賜物は、「その時にも」存続する永久的な賜物であることが指示されているのです。

預言や異言や知恵と云ったカリスマ(御霊による能力)が、「エクレーシア」形成の為に、必要に応じて、一部の人に一時的に与えられる性質のものであるのに対して、同じ聖霊が生み出して下さるものでも、**「信仰と希望と愛、この三つ」は主に属する者たちにそのすべてを与えられ、完全なものの来る「その時にも」廃れるものではなく、「いつまでも残るもの」、終末の時にも存続するものです。その中でもアガペー(愛)は、直接神のいのちの質をあらわすものとして、「最も大いなるもの」と呼ばれます。**

ついでに、２０世紀の代表的な神学者二人が、「コリント人への手紙Ｉ」で推奨している個所をご紹介しますと、その一人カール・バルトは自著『死人の復活』において、十五章の「死人の復活」こそ、この手紙のクライマクスであると云っているのに対し、もう一人の神学者ブルトマンが批判の論文を発表し(一九二六年)、この手紙全体のクライマックスは、一二～一四章、特に十三章であると反論しているとのことです。いずれにせよ十三章と十五章が、この手紙の二つの高峰をなしていることは間違いないと、市川喜一師は書いておられます。熟読玩味されんことを！

「信仰・希望・愛」の展開の物語

第七部　《愛なる神》　溢れる愛　満たす愛　沁み込む愛（その２）

聖霊の愛（総括）

神の愛は、教会と云う共同体形成の為に必要なさまざまの能力をその構成員に与えます。しかし、その多彩な能力や働きが、《エクレーシア》と呼ばれる一つの有機体(キリストの体)を形成するのは、その様な能力を与える霊の質が《アガペー》であるからです。愛(アガペー)が孤立した人間の集合を一つの生命的有機体とするのです。愛がなければどのように賜物としての能力が華やかに現れても、それは個々の人間を誇らせるだけであって、共同体の一体性と云う本来の目的にとっては、何の役にも立たない空騒ぎにしか過ぎません。

愛が共同体を形成する原動力であるのは、愛が人と人を結びつけるいのちの力であるからです。人間の生まれながらの本性に深く巣食っている自己中心の性質を克服して、相手の価値や資格に関係なく、無条件に受け入れ、共に生きようとする力です(Ｉコリント１３章、「愛は忍耐強い。愛は情け深い」。前述参照)。「神の愛」アガペーこそキリストにある者の倫理の総体であり、愛を本質とする聖霊こそ倫理の唯一の原動力です。このコリント第一書簡では、キリストに所属する者の実際的な問題に対処することを通して、「キリストにあって生きる」ということはどういうことであるかを示し、その様な形でキリストの福音を提示しています。そして、最後に聖霊の賜物が論じられる時、その「倫理」が出てくる源泉、すなわち聖霊の賜物としての愛(アガペー)が明らかにされます。(だから１３章は、この「Ｉコリント」と云う書簡の頂点であると云えます)。

このように、キリストはご自分に属する民に賜物「カリスマ」として聖霊を与え、その聖霊によって愛《アガペー》と云う新しい質の命を注ぎ、生まれながらの人間本性とは別の新しい人間性を生れさせ、その愛によって**今まで世界が知らなかった、新しい(終末的な)共同体を形成させるのです。**

父なる神の愛

三位一体の神様がそれぞれ性質の違う愛を、私たちに注いで下さっているとは勿論考えられません。私たちの内にあって「愛とはこういうものだよ」とその時その時に応じた言行を、意識させることなく指し示して下さるのが聖霊であり、キリストの御霊であると思います。そしてそれは、愛の源泉であられる父なる神の愛(アガペー)から出て来るのです。

Ｉ、父の慈愛――イエスの「神の国宣教における愛――」

イエスの宣教を要約して神の慈愛を顕す重要な言葉が二つあります。
「アッバ」と「バシレイア」です。

Ⅰ、**「アッバ」**はアラム語の、幼児が父に対して発する愛語「お父ちゃん」です。父と子の間柄を示す愛情のこもった、世界中で用いられている言葉です。弟子たちはいつもイエスが祈っておられるこの「アッバ」と云うアラム語を聞いていましたから、ギリシャ語で書かれた福音書の中でも『アッバ、父よ』と愛情こもった、イエスの声をアラム語で再現しないではおれませんでした。おそらく弟子たちは父なる神の愛をも、イエスの「アッバ」と云う声の響きの中に聞きとっていたでしょう。

Ⅱ、**「バシレイア」**とは元来『神の支配』、神が王として支配される現実を意味しています。「神の国」と云うと、領土と云うイメージが強くなり過ぎるきらいがあります。イエスがご自分の宣教内容を「神の支配」と云う言葉で語られたのは、当時のユダヤ人の待望の中で、神の救済の時、つまり終末の時に到来する神の支配が、広く待たれていたからです。しかしイエスはこの言葉の中に、旧約では見られない独自の新しい内容を盛られたのです。

律法一点張りの当時のユダヤ教世界、神殿律法、ファリサイ派の律法、更にそれを上回る厳しい律法のエッセネ派、ゼーロタイなど、が「貧しい者たち」を圧迫していました。

「貧しい」と云うのは、収入や資産が少なくて貧困生活をしている人を一義的に示すものではありません。ユダヤ教社会では、律法を知らず、律法を守る生活をすることが出来ない人々を、「罪びと」と称して、神の民としての資格のない者として社会的に葬っていました。イエスは聖霊により、イザヤ書から受けとって、

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人には解放を、目の見えない人には視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」(ルカ　４；１８～１９)と語られました。

ここで「貧しい人に福音を告げ知らせる」とは、解放、回復、自由を与えると云う形で実現し、「主の恵みの年を告げ知らせる」こととまとめられます。貧しい人に「神の国はあなた方のものだ」と福音を告げられる時(ルカ７；２２)、神の圧倒的な恩愛の支配が来たと告示されるのです。裁きによる神の支配の貫徹ではなく、恩恵と云う原理による神の支配が来たことを告示されるイエスの宣教については、第１部、「神の国は近づいた」をご参照ください。ここではイエスの言葉**「医者を必要とするのは丈夫な人ではなく、病人だけである。私が来たのは正しい人を招く為ではなく、罪びとを招く為である」**(マルコ；２・１７)だけをあげて次にうつります。

「あなた方の父が憐み深いように、あなた方も憐れみ深い者になりなさい」(ルカ６；３６)

父が憐み深いように、と云うのは私どもが到達する愛の程度や目標を示すのではなく、根拠を示しているのだと市川師は言います。「父なる神が憐み深い方であるのは、あなた方がその父の慈愛によって生きているのだからよく知っているでしょう。だからお互いに憐み深い者になりなさい」と、神は言われているのです。その意味を明確にするために、**「神は憐み深いのだから」と訳した方がよく理解できると**師は云われます。マタイ１８章３３節に「仲間を許さない家来の譬え」が出てきます。「私があなたを赦したように(赦したのだから)あなたも仲間を赦すべきではないのか」と王は言うのです。「主の祈り」にも「わたしたちの負い目を赦して下さい。私たちも自分に負い目のある者を赦しましたように」(マタイ６；１２)と云う祈りを、イエス様が教えておられます。これは自分が神の赦しの場に留まっていることを申し述べて、神の赦し(恵み)に自分自身を委ねている祈りです。私がある人を赦しましたという行為によって、自分が神の恵みの中に留まっていることを告白しているのです。こうして**「恩恵が支配する場」**では、父が私たちに慈悲深いことと、私たちが互いに愛し合うことが一つになります。**どちらが欠けても「恩恵の支配」は成立しません。**このような相互関係があってはじめて、「恩恵の支配」の場が究極的に成立するのです。

確かに父の慈愛は完全で、私たちはそれに達することはできません。しかし、Ｃ・Ｓ・ルイスが言った通り、「私たちが他人に対して、何かを感じ、思い、行おうとする時、イエス様ならどのようにされるかを考えて、必死でイエスの真似をしようとすれば、そこに聖霊が働いて下さって、次第にイエス様に似てくる」ようになるのです。神様とイエス様は一つですから、私たちはこれに大きな望みを持って、イエスに似ることに精を出しましょう。愛を行うことは、自分を建てることをまず取り上げるのではなく、「相手の立場に立つ」、「まず相手のことを考える」、「相手を大事にする」、「大切に考える」、言葉はどのような表現であってもよいのです。内容が大切なのです。「アガペー」は結局、敵を愛し、**人間同士の違いは違いとして認めながら、**相手をあるがままに受け入れる事が、広い意味の「赦し」です。愛は必然的にこのような広い赦しの心を含んでいるのです。

私たちは、父の愛に生き抜かれたイエスを通して(イエスは「神の国」宣教において、赦しを宣べ伝え、赦しを与えられました。イエスは十字架の死に至るまで、赦す愛を貫かれました。イエスは十字架の上で、自分を十字架につけた者の為に、執り成しの祈りをささげられました(ルカ２３；３４)。また、自分を裏切ったり、逃げ去った弟子たちを最後まで愛し、復活後には彼らに現れ、共に食事をされました)、「恩恵の支配」の福音、即ち愛の支配の福音を聞くのです。「あなた方の父は慈愛深いのだから、あなた方も慈愛深い者になりなさい」と、恩恵の場に招かれる言葉を聞くのです。幼子のように無条件に恩恵を受けて、愛の場に生きること、それがイエスに従うことです。

十字架の愛・キリストの愛

十字架につけられたキリストの愛は――それは勿論同時に、「アッバ・父の愛」ですが、すでにこの一連の文書の各部において、記載しましたので，ここで繰り返しになりますが、私が最重要と考えている二点をあげるのみとします。それは

１、キリストの十字架を信じるとは、二千年昔にあった歴史的事実を信じると云うような、上滑りの事ではなく、その事実が、私たち人類の救いの為であるに留まらず、**「わたし個人の為に」、**主は二千年前に十字架にかかって下さった、と云う認識が非常に大切(信仰の根幹を創る)だと思っています。
２、パウロが「君たちは十字架につけられたキリストを実際に見ているではないか」と云っているのは、復活のキリストが今現在、生きて私たちに働きかけておられるのは、「十字架につけられて苦しんでおられるままの姿」を見ている、つまり十字架につけられたキリストと、復活の相のキリストが二重写しに見えているのだ、ということです。
この二重写しのキリストによって、私たちキリスト者も、苦しみ、悲しみ、悩みを持っていながら、「既に世に勝っている」ことを主によって知るのです

キリストの愛と云うのは、一口で言えば、キリストの御霊、聖霊によって、信仰・希望・愛を与えられてこの世を生き抜くことでしょう。

パウロは「キリストにある者は、恩恵の下にいるのであって、もはや律法は要らない。キリストが律法の終わりになられたのだ」と云います。しかし人間はそのような素晴らしい自由に耐えられないと云う弱さを持っています。何らかの外からの規範や規則に頼りたいのです。パウロはそれに対して、「聖霊による愛」だけを指し示します。パウロが「がテテヤ書」で***聖霊の実として《愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制》(ガラテヤ５；22)を挙げていますが、***これは「キリストの御霊」が与えて下さる《愛》そのものでしょう。その実から生まれる言葉を、以下に二つほどあげます。

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません」

「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者としなさい」(ローマ　１２；9以下)

そしてパウロ没後 40 年のヨハネ文書になると、もはや神の「恩恵」と云う言葉は出てこなくなり、徹底的に、「神様、主キリストが私たちを愛される愛」「聖霊の愛」によって、「私たちが睦みあう愛の言葉」によって満ちたものになります。ヨハネ文書のその言葉を二、三

紹介して、「愛」の項を終わりたいと思います。

ヨハネにおける愛

降下する愛

アガペーを使っているのは、その文書量の割合から云うと、聖書の中てヨハネ文書が一番多い。パウロにおいては「恵み」が前面に出ているので、「恩恵の使徒」と呼び、ヨハネは「愛」だけに集中していますので「愛と使徒」と呼ぶことも出来ます。

「神はその独り子をお与えになる程に世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハネ３；6)。

ヨハネにおいては、イエスは世界が創られる前から神と共におられました「独り子」であり「御子」です。イエスが地上を歩まれたのは、御子を神が遣わされた結果なのです。十字架に至るイエスの生涯は「永遠にいます」神の御子が「肉体」を取って私たち人間の前に現れた姿です。このイエスを遣わされた方を信じることが神の愛を受け入れる事であり、神が与えて下さる永遠の命に与ること、すなわち救いなのです。イエスが世に現れたこと自体が、神の顕現そのものです。ヨハネにおいて愛は基本的に「降下する愛」、即ち上なる者が下にいる者の所に降りてきて、下の者を救い上げると云う方向性を持つものです。

互いに愛しなさい

イエスは　光と命の世界から、闇と死のこの世に下って来られて、神のいのちの質である愛を、その愛を全然知らないこの世に知らされた。ヨハネ普福音書のイエスは初めから終わりまで、ただ神を信じきることだけを世に求めておられる。

「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです」(Ｉヨハネ　4；7～8)

「いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまって下さり、神の愛が私たちの内で完っとうされているのです」(４；12)

「神はわたしたちに、ご自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神も私たちの内にとどまって下さることが分かります」(Ｉヨハネ４；13)

これが、無条件絶対の愛が兄弟愛として成立する場です。神はイエスを信じる者に、復活されたイエスを通し聖霊を与えて下さいました。この御霊こそ、私たちが死から命に移ったことの実質であり、「アガペー」を可能にする力です。神の霊とは、神の命の質である愛の霊です。

まだまだ挙げるべき聖句は多いのですが、あとは皆さまが選んでください。

最終回「希望は」第８部に記載します。　芦屋聖マルコ教会信徒　　畑野栄一編